



## 留萌の農業 2

その後、大正に入ると菜種の栽培が少なくなり、豆類の中ではえんどう豆、長うずら、大福豆、金時豆等の菜豆類が多くなり、麦類の中では馬の飼料となる燕麦の作付け面積が増加する。これは陸軍の軍馬補充部への軍用馬の飼料として軍に買い上げられたものである。また、この時代は亜麻の作付け面積も増加しているが、これも軍用の被服の材料として用いられたものである。

また、明治時代には作られていなかった青えんどうが大正にはいつて作付けされるようになる。これは第一次世界大戦（大正三〜七年）による影響でヨーロッパで青えんどうの需要が増し、北海道内では多くのえんどう成り金が生まれた。

福 士 広 志

海のふるさと館学芸係長

青えんどうは従来の数倍の値段で取引されたという。ただし、留萌では作付け面積が少なかったこともあって、あまり大きな影響はなかった。また、この頃に除虫菊の栽培も行われたという。

留萌の開拓農家にとって、大きな転機があった。留萌が許可されたのである。自

原野の植民地の農民の大半が小作農であった。昭和の初め頃は農家への税金も割合に高く、その上小作料は豊作不作に関係なく一定であったため、農家は不作の年は小作料の減免を願うでなくてはならないようであった。このため、幌糠、峠下の農民は御料地の解放を求める運動を展開し始めた。また、藤山方面は藤山農

た。しかし、払い下げには多額の資金を必要としたために、それを調達するためは大正十四年に「自作農創設維持資金」を創設し、多くの人々の運動のかいあって、昭和五年十月御料農地及び宅地八百三十町歩を本来の開拓者たちに払い下げが許可されたのである。自

場の管轄になっていたが、昭和十三年に創設者であり農場主の藤山要吉が八十七歳で亡くなると、藤山家より第一次解放が行われた。また、三年後の昭和十六年には第二次解放が行われ、藤山以南の留萌原野の農場はほとんどが自作農として自立したのである。藤山農

作農資金は期間二十四年、利率年三分三厘で、反あたり十円であった。しかし、この解放は順調に進んだわけではなく、何回も話合いがもたれ、完了したのは昭和十五年のことである。こうして、開拓民は晴れて自分の土地として耕作することができたのであった。

場の払い下げ価格は反あたり二十円〜三十円であったが、戦後の物価変動によりほとんど棒引きにされてしまった。また、戦後の昭和二十一年には占領軍による農地改革がおこなわれ、ほとんどの農民が自作農として独立するに至ったのである。



豆をさやからとるカラサオ